

歳時記



飛蝗

走れ走れ子等諦めぬ飛ぶ飛蝗

佐藤 律子

「飛蝗」(ばった)は、秋の季語。「はたはた」「さちさち」とも言いますが、一説には飛距離は五十メートルとも百メートルとも。下五の「飛ぶ飛蝗」がそれを言わんとしているようです。動詞も使い方次第でこなにも楽しい躍動感のある句に変身します。

今月の推薦句

野分晴牛の背に置くブラシかな

佐藤 八千子

野の草を吹き分けて通る秋の風のと晴れることを「野分晴」と。牛の背にブラシでこの後のことの様子が想像できます。

冬始め余生をきざむ万歩計

豊 國

年齢とともに弱くなる足腰、ランニングで鍛えた豊國さんもジョギングに変わりました。中七で句が生まれかわりました。

爺爺の手柄話や零余子飯

重 吉

元警察官で県警で御活躍の重吉さん。手柄話はお孫さんに聞かせているのでしょうか。面白い話にお二人とも零余子飯を食べるのを忘れてしまっています。

俳句の基本

ごいごい切るのか切れるのか

読者俳句

ふるさとの俳人たち

その⑩

最終「落」の仲間たち

番外編

俳句結社「落」は、昭和四十七年に高野素十のすすめで倉田紘文氏の主宰で創刊され、誌友は全国各地、海外にまで広がった結社である。「落」は同人制をしかず一人一人が皆平等という考え方で研鑽を深め合い多くの人に愛された。「大分県俳壇史」によると九重町は、落玖珠合同句会や恵良句会、富来口庵句会、落九重句会と、実に「落」の流れを汲む句会が相次ぐ中で、昭和 平成にかけ隆盛を極めた。平成九年に発刊された落の新作集「五十人撰集」の中から、その仲間たちの格調高い名句を紹介する。(順不同、一部抜粋)

元旦の岬は岬山は山 佐藤 俊峰  
音踏みて落葉の海を歩きけり 井上 阿堂  
み仏も素足に春の浅きかな 梶谷 貴虹  
万作のゆれて花びら解きゆく 井上 睦子  
木漏れ日に目元春めく摩崖仏 麻生 良昭  
象さんとなる遠足の母と子と 井上 一灯  
初春や村に一つのポストかな 小野十三日  
花の雨つきぬ話に別れけり 麻生巳津子

白梅の一つが涙ためてみし 麻生 直美  
龍の玉空の青さを集めけり 佐藤美智子  
弾き初めの指美しき神田川 帆足 保子  
沈み橋春の瀬音に変わりけり 宇佐 明枝  
水辺には流れの音と猫柳 坂本喜代香  
濃淡の山重なりて野焼あと 原田智恵子  
打ち水をほめて娘の里帰り 帆足りつゑ  
墨のいろ少し濃くすり賀状書く 日隈紀美子

佳作 二十席

掛け算の残りしところ畦豆を干す 泉 溪  
秋澄むや一筆箋の漉き模様 直 人  
芒の穂首に飾りて二俣山 一 主  
杉山のてっぺん満月顔を出す 左世美  
喉に鳴る新酒の音を聴きながら 則 子  
秋澄むや程よき距離を保つ人 香 澄  
夕飯は香り待ちたる秋キノコ ヤスコ  
老いて子に習いしレシビ寒露かな 勝 子  
芋の露手の裏見せてしま、いけり ヨウ子  
政論の発意空しや秋の空 桐 友

校庭をひとり占めして舞う落葉 純 子  
流れなき川石白し鴉の声 末 子  
星月夜胸深々と亡夫想う ちズ子  
すつとんと夕日の落ちて人恋し トシ子  
友よりの里芋夕餉の主役なり 好 美  
吟行や我が心知る萩の花 ムツ子  
七不思議千町無田に稲穂かな 文 雄  
薄紅葉妙見宮に語りかけ 文 子  
みそ萩や庭いちめんのこんべいとう 良 子  
人の無しテニスコートや烏瓜 次 江

(選者・評) 第六十七回の角川俳句賞の発表があり、岡田由希さん(現代俳句協会)が受賞。(秋の日や牛牽くやうに犬を牽き)「飛ぶ犬と飛ばない鳥を飼ふ日永」(涼風や乳牛たまに走りや)五十句の中でこの三句に注目した。現代俳句らしいとか着眼を変えればこんなにも愉快な句ができるんだと思った。どこに目をつけるか、同じ風景でもずつと見続けられ何が何が見えて来るという。人様の句をしっかりと口承する習慣も付けたものである。師走を迎えます。お身体ご自愛ください。(選者 ことりゅうしよう)

12月号の締め切りは、11月29日(必着)でお願いいたします。選者(古後粒勝)宅にハガキ等で直接送付いただいても結構です。住所(九重町大字栗野1414番地)